

地域支援における大学の役割

－子育て期のニーズ調査－

二重佐知子・郷間 英世

The Role of Universities in Community Support Parenting Phase of the Needs Survey

Sachiko Nigara and Hideyo Goma

要旨

本研究は、子育てをしている人々の生活の質の向上を目指した地域支援に関連した大学の役割を検討した。

保育所等に通う乳幼児の保護者を対象に、地域支援に関連した大学に期待するニーズとその理由についてアンケート調査をした。調査時期は、2019年7月～8月であった。対象者は男性3名、女性98名であった。年齢は20歳代が7名、30歳代が65名、40歳代が29名であった。養育している子どもの人数は、1人が24名、2人が48名、3人が24名、4人が3名、5人が2名であった。子育て期の人々において大学に期待するニーズで1番多かったのは、「子どもの食事や栄養に関すること」であり、その理由は、児の偏食、栄養バランスや小食の対策等であった。2番目に多かったのは、「子どもの発育や発達に関すること」であり、その理由は、児の発達障害、言葉の遅れ、吃音等であった。3番目に多かったのは、「子どもの遊びに関すること」であり、その理由は、年齢に合った遊びを知る等の要望であった。

大学の役割は大きく教育、研究、地域貢献に分けられる。核家族化が進み、家庭や地域での子育ての支援が少なく、育児期の親は負担感、孤立感を抱え、子育てに対して困難感を持っている親が増加している中、今回の調査より、子育て期の具体的なニーズが把握でき、大学が担う地域支援の方策が明らかになった。

キーワード：大学、地域支援、子育て、ニーズ

I. はじめに

我が国は、急激な少子高齢化の進行、核家族化、地域コミュニティの衰退が進み、社会環境が大きく変化している。そのような中、教育行政機関である中央教育審議会では、2005年に「我が国の高等教育の将来像（答申）」において、多様化した学習者の様々な需要に的確に対応するため、大学は期待される役割・機能を十分に踏まえた教育・研究・社会貢献という使命・役割を有するとした¹⁾。また、2013年度から文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」が開始された。この事業は、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学を支援し、地域の課題（ニーズ）と大学の資源（シーズ）の効果的なマッチングによる地域の課題解決に取り組むものである²⁾。つまり、大学の社会貢献は、地域の実情に応じた効果的な支援を実践することであると言える。

姫路大学において、2019年に「姫路大学健康・教育実践研究センター」が設立された。本センターでは、教育学部と看護学部が協力しながらそれぞれの特徴を生かし、子どもから高齢者まで幅広い支援や健康の維持促進、また、障害児（者）のQOLの向上を目指した研究及び支援を行っている。また、センターでは、発達や生活の相談活動、公開講座、子育てや健康教室、地域の人々の活動の場の提供とその支援を行っている。

本研究は、姫路大学健康・教育実践研究センターの設立を契機に、地域で生活している子育て期の人々のQOLの向上を目指した地域支援を行い、そのプログラムの立案や実施に生かしていくためのニーズ調査を実施したので、ここに報告する。

II. 方法

姫路大学周辺の保育所と子ども園の2か所に通う乳幼児の保護者を対象とした。調査方法は、保育所長及び保護者会を通して、文書及び口頭で調査を依頼し了解が得られた後、調査用紙を配布した。回収方法は、保育所に回収箱を設置し、後日、研究者が箱を回収した。調査時期は2019年7～8月であった。調査内容は、姫路大学健康・教育実践研究センターで行ってほしい相談やプログラム内容（「子どもの発育や発達に関すること」、「子どもの食事や栄養に関すること」、「子どもの基本的な生活習慣のこと」等13項目）と選択した理由について質問し回答を求めた。

倫理的配慮として、調査は匿名とし、内容は個人が特定できないようにした。また、調査した内容について説明を受けることができること、アンケートの返信をもって協力への同意とし、返信後は協力の撤回ができないこと、調査結果は報告書にまとめ発表することを依頼文にて説明した。本研究は、本研究者が所属する大学の倫理審査を受けた（承認番号：2019-N007）

表1 属性

	n = 101
男性	3
女性	98
20歳代	7
30歳代	65
40歳代	29
養育している子どもの数	
1人	24
2人	48
3人	24
4人	3
5人	2

(人数)

表2 姫路大学健康・教育実践研究センターで行ってほしい相談やプログラムの内容と選択理由について

項目	希望人数	選択理由
子どもの食事や栄養に関すること	43	子どもがあまり食べてくれないから、レシピや工夫点など知りたい 好き嫌いや食べ残しもでてきたため 選択理由数40
子どもの発育や発達に関すること	40	発達障害の子どもがおり、療育も受けているが、もっと理解をして子どもの成長に生かしたい 何が正しくて、何がダメなのか正解が分からないため 選択理由数33
子どもの遊びに関すること	31	どんな遊びが発達によいか、楽しんでできるか スマートフォンやゲームの付き合い方について 選択理由数29
子どもとの接し方に関すること	27	何度同じことを言っても聞いてくれないし、「イヤヤ」とばかり言うのでイライラする 自分の接し方に自信がもてない 選択理由数26
子どもを遊ばせる場や機会	24	子どもにいろいろな経験、体験をさせてあげたいです ゲームばかりしているので、他にどんな遊びがあるのか情報がほしいので 選択理由数16
子どもの病気やけがに関すること	19	少しのことでも心配し、病院へ行くポイント・判断を知りたいから 子どもによくある病気やけが、その時の観察点、対処方法、受診のタイミングなどを学びたいです 選択理由数15
子どもの基本的な生活習慣のこと	17	日常的に気をつけること、よいこと、姿勢など 仕事をしながらだと不規則になるので、将来どう影響してくるのか気になる 選択理由数11
子育てに関する総合的な情報提供	12	地域の環境（保護者教育への関心度等）によって子育ては変わってくるので、そのあたりをどの程度子どもに求めるのか悩んでいるので 良い情報はどんどん色々な形で発信してほしい 選択理由数8
祖父母との子育て等の関わりに関すること	10	よく子どもをみてもらうことがあるので、考え方がちがったりするところをどうしたらよいか 祖父母が子どもを甘やかすため、育児に対する考え方の違いがあるから 選択理由数10
保護者の不安や悩みの相談	8	夫の仕事が忙しい時など、身近に相談できる相手がない場合は助かる 相談する場がなさすぎるから 選択理由数6
地域のコミュニティでのつながり	5	同じ目的をもった人とも繋がりたい 県外から引っ越してきたので、地域の情報が分かりにくい 選択理由数3
保護者同士の仲間づくりの場や機会	4	地元ではないので、同じくらいの子どもがいるママ達と交流する機会があればよいと思う 機会がなく、あっても話しにくいこともある 選択理由数3
保護者の生涯学習に関すること	4	興味がある ほぼ子育てばかりで何も自分の為にできていないので、保育ありで親が学べる機会があるとうれしいです 選択理由数3

Ⅲ. 結果

1. 基本属性について (表1)

調査用紙は260部配布し、回収数は101部であり、回収率は38.8%であった。対象者の性別は男性3名、女性98名であった。年齢は、20歳代7名、30歳代65名、40歳代29名であった。養育している子どもの人数は、1人24名、2人48名、3人24名、4人3名、5人2名であった (表1)。

2. 姫路大学健康・教育実践研究センターで行ってほしい相談やプログラム内容、選択した理由について (表2)

姫路大学健康・教育実践研究センターで行ってほしい相談やプログラムの内容と希望した人数 (内、1人の子どもを養育している保護者の希望数)、選択理由を記す。「子どもの食事や栄養に関すること」43名 (内14名)、選択理由は、「子どもがあまり食べてくれないから、レシピや工夫点など知りたい」、「子どもの食事に時間がかかるので、楽しく美味しく栄養バランスのよい食事をとるためにどう工夫すればいいのか知りたいから」、「好き嫌いや食べ残しもでてきたため」等、40の理由が得られた。「子どもの発育や発達に関すること」40名 (内14名)、選択理由は、「発達障害の子どもがおり、療育も受けているが、もっと理解をして子どもの成長に生かしたい」、「何が正しくて、何がダメなのか正解が分からないため」、「子どもの発育には親の接し方がすごく関わってくると思うので、どのように関わっていったらいいのか等、発育の事に関して色々きいてみたいと思いました」等、33の理由が得られた。「子どもの遊びに関すること」31名 (内10名)、選択理由は、「どんな遊びが発達によいか、楽しんでできるか」、「スマートフォンやゲームの付き合い方について」、「仕事が忙しくなかなか遊べない」等、

29の理由が得られた。「子どもとの接し方に関すること」27名 (7名)、選択理由は、「何度同じことを言っても聞いてくれないし、「イヤヤ」とばかり言うのでイライラする」、「朝の身支度や食事の時に注意で度々けんかのような言い合いになるので、どう話せば感情的にならずにすむか、日々悩んでいるため、子どもが大きくなるにつれて、反抗的な言い方が増えて、直す方法が分からないため」、「自分の接し方に自信がもてない」等、26の理由が得られた。「子どもを遊ばせる場や機会」24名 (内7名)、選択理由は、「子どもにいろいろな経験、体験をさせてあげたいです」、「公園でボール遊びをしたらダメ等、禁止事項が多過ぎて自由に遊べないのが、何だか見ていると可哀想になる」、「ゲームばかりしているので、他にどんな遊びがあるのか情報がほしいので」等、16の理由が得られた。「子どもの病気やけがに関すること」19名 (内4名)、選択理由は、「少しのことでも心配し、病院へ行くポイント・判断を知りたいから」、「子どもによくある病気やけが、その時の観察点、対処方法、受診のタイミングなどを学びたいです」、「保育園に行き出してよく病気やけがが増えたから」等、15の理由が得られた。「子どもの基本的な生活習慣のこと」17名 (内7名)、選択理由は、「日常的に気をつけること、よいこと、姿勢など」、「仕事をしながらだと不規則になるので、将来どう影響してくるのか気になる」、「今の生活リズムでよいのか? 心配な事もあるので」等、11の理由が得られた。「子育てに関する総合的な情報提供」12名 (内4名)、選択理由は、「地域の環境 (保護者教育への関心度等) によって子育ては変わってくるので、そのあたりをどの程度子どもに求めるのか悩んでいるので」、「良い情報はどんどん色々な形で発信してほしい」、「これから習い事など考えることになると、どのよ

うなものもいいのかも知りたい」等、8の理由が得られた。「祖父母との子育て等の関わりに関すること」10名（内1名）、選択理由は、「よく子どもをみてもらうことがあるので、考え方がちがったりするところをどうしたらよいか」、「祖父母が子どもを甘やかすため、育児に対する考え方の違いがあるから」、「一緒に暮らしているのではどの程度影響しているのか」等、10の理由が得られた。「保護者の不安や悩みの相談」8名（内3名）、選択理由は、「夫の仕事が忙しい時など、身近に相談できる相手がいない場合は助かる」、「同じような不安や悩みを抱える方の意見を聞いてみたい」、「相談する場がなさすぎるから」等、6の理由が得られた。「地域のコミュニティでのつながり」5名（内3名）、選択理由は、「同じ目的をもった人とも繋がりたい」、「結婚して他県から姫路市に来て、新しいコミュニケーションになかなかないでいるので方法をみつけない」、「県外から引っ越してきたので、地域の情報が分かりにくい」の3の理由が得られた。「保護者同士の仲間づくりの場や機会」4名（内2名）、選択理由は、「地元ではないので、同じくらいの子どもがいるママ達と交流する機会があればよいと思う」、「保育園の送り迎えだけでは、なかなか関わり合いがないため」、「機会がなく、あっても話しにくいこともある」等、3の理由が得られた。「保護者の生涯学習に関する事」4名（内1名）、選択理由は、「興味がある」、「自分軸の作り方等」、「ほ

ぼ子育てばかりで何も自分の為にできていないので、保育ありで親が学べる機会があるとうれしいです」の3の理由が得られた。「その他」では、「家族がHappyにすごせる方法」、「夫婦が仲よくすごせる方法」、「災害の中で生き抜く力をつける方法」等があった。

3. 1人の子どもを養育している保護者と2人以上の子どもを養育している保護者について(表3)

姫路大学健康・教育実践研究センターで行ってほしい相談やプログラムの各内容について、1人の子どもを養育している保護者と2人以上の子どもを養育している保護者での χ^2 乗検定を実施した (IBM SPSS Statistics ver.25). その結果、「子どもの発育や発達に関する事」(p<.01)について有意な差が認められ、1人の子どもを養育している保護者のほうが、子どもの発育・発達に関する内容を希望している結果となった。

IV. 考察

1. 姫路大学健康・教育実践研究センターで行ってほしい相談やプログラム内容、選択した理由について

子育て期の人々において、姫路大学健康・教育実践研究センターで行ってほしい相談やプログラム内容で1番多かったのは、「子どもの食事や栄養に関する事」であり、その理由は、児の偏食、栄養バランスや小食の対策等であった。幼児期の

表3 1人の子どもを養育している保護者と2人以上の子どもを養育している保護者について (n=101)

		子どもの発育や発達に関するプログラム参加希望				検定
		有		無		
		n	%	n	%	
子どもの数	1人	14	58.3	10	41.7	**
	2人以上	25	32.5	52	67.5	

** p < .01 χ^2 検定

子どもの食事は健全なからだの発育、発達に重要であり、食事時間は、基本的な生活習慣や社会的なスキルを習得する機会となる。そのため子どもの食事に関して不安を感じる親は多い。全国の幼稚園・保育園に通う幼児の保護者を対象とした調査では食事に関する心配ごとの有無について58.3%が「ある」と答えている³⁾。富田ら⁴⁾は、子どもの食に関する相談を実施した結果、相談内容で頻度が高かったのは、「あまりかまない、丸のみする」、「時間がかかる」、「好き嫌が多い」であったことを報告した。本研究でも同様の結果が得られた。

子育て期の人々において、姫路大学健康・教育実践研究センターで行ってほしい相談やプログラム内容で2番目に多かったのは、「子どもの発育や発達に関すること」であり、その理由は、児の発達障害、言葉の遅れ、吃音等であった。現在の母親は子育てのマニュアル本を参考にしすぎており、子どもの健康状態や発育状態が良好である場合は問題ないが、発育が標準値よりも外れている場合などは大きな不安を持ち、戸惑い悩むということが指摘されている⁵⁾。子どもの発育や発達に関する知識を得ることは、育児不安の軽減につながり、そのことが子どもの生活に良い影響を及ぼす可能性が考えられる。

子育て期の人々において、姫路大学健康・教育実践研究センターで行ってほしい相談やプログラム内容で3番目に多かったのは、「子どもの遊びに関すること」であり、その理由は、年齢に合った遊びを知る等の要望であった。乳幼児期の子どもは、一日の大半を遊びが占め、保護者は遊びから子どもの成長を感じることができる。松本ら⁶⁾は、母親と子どもの遊び回数が多いほど男児の運動能力が促進され、男女とも運動的遊びを含む身体活動量の多さが幼児期の運動能力の発達を促す

ことを報告がした。さらに、父親の育児参加による関わりは、「子どもとの遊び」が多く、子どもの社会性や運動の発達を促し、それが母親への精神的サポートにつながり、安定した養育態度へとつながる⁷⁾。つまり、子どもの遊びへの支援は、家族支援につながると考えられる。

姫路大学健康・教育実践研究センターでは、地域の人々の活動の場の提供を行っている。本研究の調査より、保護者同士の仲間づくりや地域のコミュニティとのつながりを希望する等の要望があった。子育て仲間のサポートがあることは、育児における不安感と制約感を抑制する可能性が示唆された⁸⁾。母親は、同じ環境にいる母親と育児の悩みを共感することで、悩んでいるのは自分だけではないことに気づき、育児肯定感を高められる⁹⁾。転勤や住環境の為、祖父母と同居・近居できない家庭も増え、心を許せる近親者や親しい友人からの育児支援が得にくい家庭がある。希薄化する地域コミュニティにおいて、母親が新たな人間関係づくりに難しさを感じ、孤立した母親は必要な育児支援を得られず、子育てへの不安や負担感を増大させる¹⁰⁾。本研究においても、「地元ではないため交流する機会を希望している」ことを示しているデータがあり、子育て支援において、重要な活動であると考えられる。

2. 1人の子どもを養育している保護者と2人以上の子どもを養育している保護者について

1人の子どもを養育している保護者と2人以上の子どもを養育している保護者について検討した。芝崎ら¹¹⁾は、育児経験の少ない母親は、育児経験の多い母親と比べて子どもの発達についての知識が少ないこと、また兄弟の相互作用によって子どもの社会情動能力に関する問題が解消される機会をもたないことから、子どもの発達についての情報が少なく、発達に関する悩みを解消する

ための社会的サポートがより必要となると報告した。また、山原ら¹²⁾は、保護者の育てにくさ・困り感に関する研究において、一人っ子は第二子以降の困り感のレベルと比較して有意に高くなる等、家族構成によって困り感が増幅する可能性を報告した。一人っ子の母親は2人以上の子どもをもつ母親よりも援助要請行動をするとされ¹³⁾、本研究においても、同様の結果が得られた。

V. 結論

大学の役割は大きく教育、研究、地域貢献に分けられる。本研究では大学が担う地域支援を検討するため、子育て期の人々に大学に期待するニーズを調査した結果、食事や栄養、発育や発達、遊びに関する情報の要望が多く、大学を基点とした地域支援の要望が把握できた。核家族化が進み、家庭や地域での子育ての支援が少なく、育児期の親は負担感、孤立感を抱え、子育てに対して困難感を持っている親が増加している中、今回の調査より、子育て期の具体的なニーズが把握できた。地域の子育てニーズを把握し、ニーズに適した支援ができる人材がある中で子育て支援プログラムを実施することは、家庭や地域の子育て力の向上につながる¹⁴⁾。

本研究の限界は、研究対象の保育所は2か所であり、対象者数が少ないこと、横断研究であり、結果の連続性や安定性を明示することができなかったことである。今後は、今回の調査を踏まえ、大学が担う効果的な地域支援方策を具体的に検討していけるよう、研究の継続性が求められる。

利益相反

本研究は申告すべき利益相反はない。

VI. 文献

- 1) 文部科学省 (2005) 我が国の高等教育の将来像 (答申), http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm (アクセス日2020/08/05)
- 2) 文部科学省 (2013) 平成25年度「地(知)の拠点整備事業」公募要領, https://www.mext.go.jp/component/a_menu/educatoin/detail/_icefiles/afeldfile/2013/04/15/1332621_01_3_1.pdf (アクセス日2020/8/11)
- 3) 日本歯科医学会重点研究委員会:「子供の食の問題に関する調査」報告書, 第2章 子供と保護者への食の支援に関する調査, 47-92, 2015
- 4) 富田かをり, 高橋摩理, 内海明美他: 食事を楽しくないものにする要因の検討-新宿区乳幼児食べ方相談記録の分析から-, 小児保健研究, 75 (3), 322-328, 2016
- 5) 中橋恵美子 (2004). 親からみた乳幼児へ健診の期待 保健師ジャーナル, 60 (5), 434-437
- 6) 松本依子, 青木邦男: 幼児の運動能力に影響を及ぼす要因, 日本家政学会誌, 44 (6), 439-449, 1993
- 7) 原口雅浩, 手島聖子: 育児ソーシャル・サポートの構造, 久留米大学心理学研究, 5, 21-28, 2006
- 8) 小池由佳, 角張慶子, 齋藤裕: 少子地域における子育てと地域子育て支援サービス利用の現状-0~2歳児の保護者を対象としたアンケート調査結果から-, 人間生活学研究, 8, 63-72, 2017
- 9) 島田葉子, 杉原喜代美, 橋本実里: 育児ストレスや育児不安, 育児困難を抱える母親への

- 育児支援の実際とその効果についての文献レビュー, 足利大学看護学研究紀要, 7 (1), 68-81, 2019
- 10) 柏まり, 岩佐和典, 佐藤和順: 保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポート尺度の開発, 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 23 (1), 33-39, 2016
- 11) 芝崎美和, 芝崎良則: 母親が求める育児サポートとは-母親の特性と求められるサポートとの関係性-, 日本保健福祉学会誌, 22 (1), 1-12, 2015
- 12) 山原麻耶, 小枝達也: 親子教室等に通う保護者の育てにくさ・困り感に関する研究, 鳥取大学地域学部紀要, 11 (1), 31-43, 2014
- 13) 湯浅京子, 櫻田淳, 小林正幸: 育児相談の被援助志向性に関する研究: ストレス反応と保健師に対する被援助バリアの視点から, 東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要, 2, 9-18, 2006
- 14) 周防美智子, 中典子, 田口陽子他: 地域子育て支援拠点事業における支援に関する研究, 岡山県立大学保険福祉学部紀要, 24 (1), 81-89, 2017